

## 『全国貸本新聞』から見る昭和の貸本屋

西村 珠江

近年貸本漫画という媒体が注目されているが、それを取り扱っていた貸本屋自体には注目が向いていない。昭和、特に戦後の貸本屋という存在が一体どのようなものであったのかについて、体系的にまとめられた文献は多くない。この様な状態を踏まえ、貸本屋の歴史を踏まえた上で戦後の貸本屋の実態を内情から探ろうと考えた。

そこで本論文では先ず、戦後昭和の貸本屋に至るまで日本の貸本屋がどのような歴史を歩んできたのかを、江戸期、明治期、大正期、昭和期と時代ごとにまとめた。それを踏まえ戦後の貸本業者の全国組織であった全国貸本組合連合会の成立背景を解説し、その機関誌である『全国貸本新聞』（1957～1973）を主な資料とし、その他の資料と合わせ戦後の貸本業について、実証的にその内情を分析した。

分析方法は『全国貸本新聞』の記事を 22 の項目に分類し、各項目の記事数や内容の推移をまとめ、考察するものである。これにより戦後の貸本屋の実態を体系的に考察することが可能である。この手法で記事进行分析した結果をグラフ化し、項目ごとにその年毎の記事数の変動や内容の変化について分析を行った。この記事分析を行った結果、記事から読み取れる貸本屋、及び全国貸本組合連合会の活動やその姿勢は大きく二つの問題に影響されていることが分かった。悪書追放・良書普及運動と、雑誌価格問題である。

悪書追放・良書普及運動は、巷に氾濫する子供に悪影響のある不良凶書を駆逐し、健全な育成を助ける良書を普及させようという運動で、各地方自治体の青少年保護条例の制定が主な内容として挙げられる。この問題に対し、全国貸本組合連合会は初期は条例の制定や施行に対し断固反対の立場をとっていたが、徐々に運動に賛同する立場をとるようになっていった事が記事进行分析した結果分かった。

雑誌価格問題は昭和 35 年から 38 年まで活発に取り扱われていた。始めは貸本業者からの反対運動もあり値上げは延期されていたが、昭和 36 年から本格的に漫画の値上げが実行され始め、全国貸本組合連合会の反対運動に関わらず出版社側は値上げの姿勢を貫いた。

また貸本屋の衰退に関しては、二つの問題以外にも大衆の貸本屋離れが進んでいた事が読み取れた。本が借りるより買う方が手軽になった事と、週刊誌の登場で本の寿命が短くなった事が理由に挙げられる。

以上の様に、大きな二つの問題と、貸本屋という営業形態が時代に合わなくなった結果貸本屋は衰退していった。しかし貸本屋は組織を作り、その流れに様々に抵抗していた事が明らかになった。

(指導教員 原 淳之)